

## 新刊紹介

編集委員会

『新維管束植物分類表』. 米倉浩司 (著),  
B6判. 358頁. 2019年3月1日. 北隆館.  
3,000円+税

本書は、2012年に同社より出版された『維管束植物分類表』の全面改訂版である。旧著のAPGにかわり最新のAPG体系に則っている。今回は日本国内にとどまらず全世界の種子植物とシダ植物の科を収録している。全世界84目478科と、約3000属をとりあげているので、世界の植物の多様性の理解の助けとなろう。本書は、旧著『維管束植物分類表』同様、目や科と、それぞれの科に含まれる属をアルファベット順に並べたリストであ

る。旧著は邑田仁監修であったが新版は米倉氏単独の著となっている。

最近のAPGによる新しい植物分類は、APGのバージョンがアップされるたびに著作が目まぐるしく出版されており、我々は翻弄されてきたところであるが、著者が言うようにAPGにおいて系統関係は今後大きな変更はないと考えられるとのことなので、これで一段落と捉えてよいのかも知れない。

種子植物およびシダ植物のこれまでの一般向けの系統分類関係の主な書籍をまとめてみた。種子植物、シダ植物両方を扱ったものはシダ植物の準拠体系をカッコ内に示した。

書名	出版年	準拠体系	著者	出版社
<b>種子植物</b>				
高等植物分類表	1952	エングラール	伊藤 洋	北隆館
日本植物誌	1953	エングラール	大井次三郎	至文堂
朝日百科 世界の植物	1978	エングラール		朝日新聞社
新高等植物分類表	1980	新エングラール(スミス)	伊藤 洋	北隆館
日本の野生植物	1982 ~ 1989	新エングラール		平凡社
朝日百科 植物の世界	1994 ~ 1997	クロンキスト		朝日新聞社
Mabberley's Plant-Book	2008	APG	Mabberley	ケンブリッジ大学
植物分類表	2009	APG	大場秀章	アボック社
高等植物分類表	2009	APG(スミス)	邑田仁・米倉浩司	北隆館
日本維管束植物目録	2012	APG (スミス)	邑田仁・米倉浩司	北隆館
日本の野生植物(1~5)	2015 ~ 2017	APG /	大橋広好ほか	平凡社
Mabberley's Plant-Book	2017	APG	Mabberley	ケンブリッジ大学
新維管束植物分類表	2019	APG (PPG)	米倉浩司	北隆館
<b>シダ植物</b>				
日本植物誌 シダ編	1957	コーブランド	大井次三郎	至文堂

日本のシダ植物	1979 ~ 1997		倉田悟・中池敏之	東京大学出版会
新日本植物誌 シダ編	1992	クビツキー	中池敏之	至文堂
日本の野生植物 シダ	1992	京大理学部紀要	岩槻邦男	平凡社
日本産シダ植物標準図鑑	2016	クリステンフス, PPG	海老原淳	学研
<b>解説書</b>				
植物自然史	1994		戸部 博	朝倉書店
新しい植物分類学	2012	APG (クリステンフス)	戸部博・田村実	講談社
植物の系統と進化	2012	APG	伊藤元己	裳華房
植物分類学	2013	APG	伊藤元己	東京大学出版会
新しい植物分類体系	2018	APG	伊藤元己・井鷲裕司	文一総合出版

『ナチュラルヒストリー』. 岩槻邦男 (著), A5判. 384頁. 2018年12月. 東京大学出版会. 4,500円+税

ナチュラルヒストリーという言葉は今日いろいろな場面で見聞きするようになった言葉であるが、具体的な意味合いを問われた場合、筆者は答えに窮してしまう。

著者はこれまで大学、博物館、植物園において研究、教育、普及活動を行ってきた現場での豊富な経験を踏まえて、本書において生物多様性や生命系をキーワードとし、ナチュラルヒストリーへの理解と実践へ向けて様々な局面から解説を試みている。

本書の内容は多岐にわたっており、要約はしにくいので目次を順に中項目まで紹介することで、ある程度著書の大意に触れることができよう。

第1章 ナチュラルヒストリーをさかのぼる  
時間軸から自然をみる / 1.1 範疇としてのナチュラルヒストリー / 1.2 ナチュラルヒストリーと科学 知の創出と伝達 / 1.3 ナチュラルヒストリーと科学の近代化

第2章 ナチュラルヒストリーを究める 生き  
ていることを科学で解く / 2.1 生物科学と

ナチュラルヒストリー / 2.2 生きていることは  
どういふことかをナチュラルヒストリーで問う  
 / 2.3 「文明が育てた植物たち」で生物多  
様性を俯瞰する

第3章 ナチュラルヒストリーをひきつぐ ど  
のように学ぶか / 3.1 ナチュラルヒストリー  
の教育 日本における知の継承の歴史 / 3.2  
自然史資料標本 / 3.3 ナチュラルヒスト  
リーとバイオインフォマティクス

第4章 ナチュラルヒストリーを学ぶ 生涯を  
通じた学習で / 4.1 日本におけるナチュラル  
ヒストリー / 4.2 大学と博物館の協働 /  
4.3 地球規模でみるナチュラルヒストリーの研  
究

第5章 ナチュラルヒストリーを展開する い  
ま必要なこと / 5.1 現代科学と知的好奇心  
5.2 ナチュラルヒストリーの目でみる生命 /  
5.3 ナチュラルヒストリーの目でみる社会 社  
会貢献とは / 5.4 ナチュラルヒストリーにい  
ま求められること

第6章 ナチュラルヒストリーと学ぶよろこび  
まとめにかえて / 6.1 ナチュラルヒストリー  
と科学 / 6.2 学ぶよろこび、究めるよろこ  
び

Tea time 1 テオプラストス 2 ラマルクと進化論 3 実態と名称 種の進化と種名の変遷 4 博物館から生物、地学への展開 5 植物の種名を知る意味 6 IOPI(国際植物情報機構)と"Species Plantarum(地球植物誌)" 7 フンボルトのコスモス 8 日本のナチュラリストの貢献 9 フィリピンで活躍したコーブランドのナチュラルヒストリー 10 ナチュラルヒストリーでみる死

このように、ナチュラルヒストリーの歴史(世界及び日本)からはじまり、分類学と生物多様性と分子生物学とのかかわり、研究方法「つらねる」と「つらぬく」、著者の専門分野のシダ植物からの俯瞰、学校教育との関連、大学や研究者の実態、科学と社会貢献、GBIFや国外の状況、資料標本の意義、生涯学習と博物館の役割、ナチュラリストの貢献、大学と博物館の連携、今後の展開への提言にまで及んでいる。また、随所に挿入されたコラム(tea time)は興味深い項目が取り上げられている。

本書を読み終えるには、筆者はかなりの集中力と時間を要した。というもチュラルヒストリーを語るのに概念的用語が多用され、形而上的表現で語られるため具体的イメージを掴めない部分も多かった。著者の哲学の披瀝ともいえよう。

この書は、著者が長年に亘りかかわり取り組んできたことから導かれた信念が繰り返して述べられていて、やや冗長感がみられるが、他面で著者の思いが伝わってくる。著者のナチュラルヒストリーとのかかわりの集大成となるものであろう。

最初に戻るが、本書を読み終えたところであるが、ナチュラルヒストリーとはと問われて

も筆者はまだ答えることができないでいる。しかし現代においてナチュラルヒストリーに沿った思考が求められるものであり、読者には本書の関心の持てる個所からでも読み進めることをお勧めする。

『ヤナギハンドブック』. 吉山寛(解説)・茂木透(写真), 新書判 176頁. 2019年3月. 文一総合出版. 2,300円+税

ヤナギは樹木の中では見分けが難しいと思われる。筆者は職業上樹木の専門家と見られるが、若いときには苦労した覚えがある。大きな特徴がなく、特に花や葉がよく似たものが多いというのがその理由と思われる。しかし国内に30種ほどなので、ツボを押さえれば意外とはっきりと区別できるものである。ところが問題もある。雑種をよく作るらしく、たまにどちらともつかないものがあるためである。その点この本は知られている雑種すべてを載せており、見分け方まで解説があるので、もしやと思ったときは雑種に当たって確認することができる。基本的に1種に見開き2ページをあて、一般的な形態・生態の解説をしている。花の細部まで詳しく写真と線画で説明されておりわかりやすい。冒頭には葉、雄蘂、雌蘂、冬芽、托葉の比較ページがあり、検索表代わりとなる。また、よく似たもの同士を取り上げて、特徴を対比してツボを示す項目もある。

本書は国内で見られる栽培種を含めた30種、5亜種、2変種に加えて確認されている31雑種のすべてを解説している。ヤナギに少し興味を持ったビギナーから、研究者まで広く活用できる内容になっている。